

市民神輿、提灯行列も初登場 水戸黄門まつり一段と華やかに

今年が市制施行 130 周年に当たる水戸市で 8 月 3、4 日、水戸黄門まつりが例年と装いを一変し、はなやかに挙行された。2 日間で祭に集まった市民、観光客は合わせて 39 万人。「市民保有の神輿としては日本最大級」と銘打った「ふるさと神輿」が初めてお目見えし、希望者を含む大勢の人々に担がれて市内を練り歩いたほか、伝統工芸品の水府提灯を主役にした「水戸黄門提灯行列」も初登場。このほか山車 13 台による太鼓をたたきながらのにぎやかな巡行や、さまざまな出で立ちの参加者約 2,800 人が市中心部を踊り歩く「水戸黄門カーニバル」が行われ、セ氏 30 度を超す両日とも水戸市街はさらなる熱気に包まれた。



2 百人に担がれて水戸市街を練り歩く「ふるさと神輿」(水戸黄門まつり実行委員会提供)

水戸黄門は、徳川御三家水戸藩の二代目藩主、徳川光圀の別称。隠居後に家臣の助さん(佐々木助三郎)と格さん(渥美格之進)を従え日本各地を漫遊したという講談の主人公にされたのがきっかけで、まず人気映画シリーズの主人公として多くの日本国民に親しまれる人物となった。さらに 1969 年からテレビ番組に登場し、途中中断時期はあるものの、今でも続く世界で類を見ない長寿番組となっている。「徳川光圀」という名前にぴんと来なくても、「水戸黄門」と聞けば知らない日本人は珍しい有名人だ。



JR水戸駅前に建つ水戸黄門像(中央)。左右に助さん、格さんを従えている

水戸黄門まつりが始まったのは、まず映画が人気を集めた時期とほぼ同じ 1961 年から。59 回目となる今年は、市制施行 130 周年であることから、さらに多くの人を呼び込むためのリニューアルが行われた。「ふるさと神輿」や「提灯行列」を新登場させただけでなく、これら新しい催しに大勢の観光客や市民の参加を募る新趣向が取り入れられた。



「地酒で乾杯」の発声をする平尾充庸茨城ロボッツ選手(中央)。一人おいて右、加藤高藏水戸黄門まつり実行委員会会長、左端、高橋靖水戸市長、その右隣、高橋祐二茨城ロボッツ選手

初日の3日は、祭の中心地となった南町自由広場に実行委員会の主な役員や市民、観光客が集まり、地元プロバスケットボールチーム「茨城ロボッツ」の人気選手の発声による「地酒で乾杯」で氣勢をあげた。広場には、日本の3大提灯産地とされる水戸の「水府提灯」、岐阜市の「岐阜提灯」、福岡県八女市の「八女提灯」が並べて飾られている。「地酒で乾杯」の後、「水戸黄門カーニバル」がスタート。「黄門ばやし」や「ごきげん水戸さん」のにぎやかな音曲に乗って茨城県内の企業や団体、学校などのダンスチームが市中心部を踊り歩き、沿道の市民、観光客から大きな声援や拍手が送られた。



水戸黄門カーニバルで踊る参加者たち

初日夜の水戸市街を彩ったのは、今年が目玉の一つである提灯行列。第一部は着物姿の水戸の梅大使や市民が水戸の伝統工芸品「水府提灯」を手に静かに行進し、第二部は一転、提灯に彩られた山車も加わる行列が続き、太鼓の賑やかな打音と合わせて水戸市街を光と音で満たした。





提灯行列（水戸黄門まつり実行委員会提供）

2 日目に登場したのは今回のもう一つの目玉である「ふるさと神輿」。4 日午後 2 時すぎ「行徳神輿」の名で知られる神輿産地、千葉県市川市の神輿製作会社「中台製作所」に特注した神輿が 3 台のトラックに積まれて、南町自由広場に到着する。その後、水戸市だけでなく周辺の市から集まった 13 台の山車が南町自由広場前の通りに集結し、中央の山車の上から高橋靖水戸市長が「日本最大級の『ふるさと神輿』は、まさに圧巻の光景です。夜には山車の大たたきあいも行われます。ぜひご覧ください！」と元気な声で呼びかけた。



集結した山車の上から呼びかける高橋靖水戸市長。左は加藤高藏水戸黄門まつり実行委員会
会長

この間、集まった山車の背後では、到着した神輿の組み立て、最後の飾り付け作業が進む。トラックから降ろされた親棒、横棒、担ぎ棒を組み合わせた上に神輿の本体を載せ、さらにクレーンで金色の大きな飾りである鳳凰をつり下げ、神輿の最上部に取り付ける。こうした一連の作業を見守りながら水戸黄門まつり実行委員会会長を務める加藤高藏水戸観光コンベンション協会会長が「2年半前に市民の神輿を作ることが決まってから、多額の寄付金が寄せられた。約2トンの神輿を担ぐために、今日は千人の担ぎ手が集まった」と、高さ4メートルもの神輿を見上げながら感慨深げに語っていた。



「ふるさと神輿」の上部に鳳凰を取り付ける作業を見守る人々

いよいよ「ふるさと神輿」が、申し込んだ市民、観光客を合わせた2百人に担ぎ挙げられて南町自由広場を出発し、沿道の市民、観光客から盛んな声援を受けて練り歩く。小さな子供たちが担ぐこども御輿も加わり、沿道の観光客の表情も和む。夜になって13台の山車による太鼓のたたき合いが始まると祭は最高潮に達した。



「ふるさと神輿」(水戸黄門まつり実行委員会提供)



こども御輿 (水戸黄門まつり実行委員会提供)



13 台の山車による太鼓のたたき合い（水戸黄門まつり実行委員会提供）

【徳川光圀と朱舜水】

「水戸黄門まつり」2日目の8月4日、地元紙「茨城新聞」の一面コラム「いばらき春秋」は、徳川光圀と、光圀が師と仰いだ中国の儒学者、朱舜水との関係に触れている。1665年江戸藩邸に朱舜水を初めて招いたとき、光圀はうどんを自ら打って舜水に振る舞い、お返しに朱舜水は郷里の拉麺（ラーメン）を作れないかあれこれ工夫して、なんとか完成させた。コラムはこうした話を沖方丁の小説「光圀伝」を引用する形で紹介している。これは作家の創作ではなく事実らしい。茨城新聞のコラムは、舜水の郷里である中国浙江省余姚市と、舜水の墓地がある茨城県常陸太田市が今年、友好都市締結20周年を迎え中学生同士の交流が行われたことも紹介している。



徳川光圀の生誕地に建てられた水戸黄門神社(水戸市三の丸)

文 小岩井忠道 (JST 客観日本編集部)

【関連サイト】

水戸黄門まつり公式ホームページ

<http://www.mitokoumon.com/koumon/>